

青雲の果て

— 武人黒田清隆の戦い —

第9回

奥田 静夫

フリーライター・開拓史研究家

第6章 屯田兵創設と西南戦争（続き）

西南戦争に参戦（続き）

4月8日、

「新政府軍の正面軍が総攻撃を開始する」との報が清隆のもとに伝えられた。

まもなく一隊が、衝背軍の方に突進してくるのが見えた。清隆は敗敵とみて斥候に探らせたが、これは味方の奥保鞏の大隊が、囲みを突破してきたものだとわかった。

清隆は、この突破口を拡大して急ぎ城中との連絡をつけようとした。

11日、鳥尾小弥太（長州）という中将が、天皇の命で衝背軍の戦線を巡視してきた。彼は、清隆に向かって、

「黒川通軌大佐の率いる部隊を、正面軍に転換してもらいたい。これは勅命である」

と告げた。

清隆は、憤然としてこれを蹴った。



山県有朋
(国立国会図書館蔵)

（総督が一切を統括するはずなのに、『勅命』とは理解しがたい。これはあの山県有朋の仕掛けた横槍に違いない）
と思った。

（いま、自分が武人（軍人）として存在を示そうという重大な局面にあって、これを邪魔するような兵力削減など、到底受けられない）

幸い、長州出身の山田顕義少将や木戸孝允も、自分の戦略を支持してくれていた。

13日夜半、清隆は青竹で地面をたたきながら、「ぐずぐずしておれるか」

とわめきながら歩き回った。

急ぐ気持ち、焦りが清隆をじりじりとさせたのだが、その言葉には、彼のこの戦いに対するさらに複雑な思いが込められていた。

清隆は、敵の背後を衝く策を献策して征討参軍に任せられたが、敵将となった西郷隆盛には恩誼があることから、こんどの戦争に加わることで体がはばかれた。

かつて薩摩の4石取りの武士の子に生まれた自分に、始終目をかけてくれたのは、あの西郷であった。

「ぐずぐずしておれるか」

とわめきながら、清隆は西郷を敵とする、この戦いからの退け時を考えていた。

衝背軍の先鋒である山川 浩 中佐（会津出身）の率いる一隊が熊本城下に入ったのは、14日のことであった。

作戦は成功し、籠城戦から50日余りで熊本城の囲みは解けた。城兵たちは嬉し涙を流した。

15日の昼ころ、清隆は厳しい表情を崩さないまま、部下を従えて入城した。

やや遅れて、山県が軍を率いて入城してきた。清隆と山県との会見は、冷え冷えとしたものであった。

薩摩軍は、日向方面に向けて転進していった。

近衛都督の西郷従道は、清隆が熊本城入りした14日、清隆に手紙を送り、

「意外之速進二而単二貴官御神略之為ス所ト感歎之至二不堪…真二偉大之御功績ト存候」

と称賛した。また、木戸孝允はこのころ病床にあったが、清隆の戦勝をことのほか喜んだ。

屯田兵の参戦

熊本城入城の翌々日、清隆は新政府中枢に電文を送り、

「参軍を辞任することを認めてほしい」

と要請した。理由は、

「前後の官軍合したれば、最早鎮定の日近きに在り」

とした。

大久保利通は、余りに早い清隆の辞意に驚き、大いにいぶかった。

しかし結局はこれを認めた。

23日、参軍解任の辞令が届いた。

このあと清隆は、すぐ木戸孝允の病床を見舞った。維新の元勳の一人である木戸が逝去したのは、5月26日であった。

話が少しさかのぼるが、屯田兵に対しても、ついに動員令が下った。

屯田兵の将校の多数は薩摩出身者だが、兵のほとんどは、かつて薩摩軍に討伐された東北諸藩の士族であったから、部隊内部の感情には、微妙なものがあった。

永山盛弘が御船で自決した3月10日、屯田兵は永山武四郎に率いられて九州に向かった。

22日、熊本の西の百貫石に上陸し、別働第2旅団長山田顕義少将（長州）の指揮下に入り、八代方面から人吉に向かう追撃戦に参加した。

5月19日、大河内付近の戦闘を経て、30日には人吉周辺の掃討に従った。屯田兵はわずか4百人余りに過ぎず、その戦闘能力も未知数であった。

このため山田顕義少将は、何気ないふうを装いながらも、正規兵一小隊をその後方に位置させた。これはいわば督戦隊であった。

6月1日、人吉に総攻撃が加えられたが、屯田

兵は熾烈な砲火の中で、かなり善戦した。

これ以降は、振り返っても、かの督戦隊の姿は見えなかったという。

人吉の攻防戦も薩摩軍の敗退によって決着がついた。11日以降は都城みやこのじょうに向けて敗敵を追い、峠を越えて小林に突入、さらに宮崎の北に転進した。

佐土原さどわらに達したのは31日であった。薩摩軍は一瀬川の対岸に砲台を築き、最後の抵抗線を構成していた。

8月2日、屯田兵は攻撃の先鋒となった。薩摩軍は必死の猛射を浴びせてきて、敵前渡河は困難をきわめた。

永山武四郎准少佐の一隊は、敢然として河水に身を躍らせた。

砲隊は火力を集中して敵陣を制圧した。堀基もと屯田事務局長の部隊も、各将校を先頭に渡河して、敵に迫った。

薩摩軍は多数の屍を遺棄して潰走した。

屯田兵は高鍋たかなべの残敵を掃討し、付近一帯の戦火は収まった。

その後、都城に引き返し、13日、引き揚げ命令を受けた。戦闘は完全に終わったわけではないが、終戦は目前だった。

21日、屯田兵の部隊は鹿児島を発って東京を経由、9月30日、札幌に凱旋した。

その少し前の24日には、清隆の崇敬する維新の巨人、西郷隆盛が城山の露と消えた。

脇腹などに銃弾を受けた西郷は、かたわらの別府晋介に、

「晋どん、もうよかろう」

と告げ、介錯かいしやくをうながしたという。51歳の生涯であった。

のちの曾我祐準（肥後）の回想によると、彼の部下が、地中に埋めてあった西郷の首級を発見し



西南戦争に参加し東京に凱旋した屯田兵（北海道大学附属図書館蔵）

て持ってきたので、坂元という少佐が桶の水で洗って、山県に捧げると、さすがの山県も涙を流し、

「この髭は三日剃りくらいだろう」

と髭を撫で、首級を曾我に渡したという。

清隆は、戦争の虚しさ、人の世の無常を嘔み締めていた。この日、伊藤博文に宛てて手紙を書き送っているが、その中では乱の終結を吉報としながらも、

「実に往時を追憶すれば、只管血涙に咽ひ悲傷する計」

としている。（「伊藤博文関係文書」4）功績により下賜された年金の受領も即刻辞退した。

山県も清隆と同様、西郷を死に追いやらざるを得なかったみずからの運命を呪っていた。

新政府の根幹を揺るがし、約4万人に及ぶ多数の死傷者を出した西南戦争は、ようやくここに終りを告げた。

清隆らの創設した屯田兵は、初めのうちは、

「百姓兵に何ができる」

と危ぶむ向きも多かったが、奮戦し、優秀部隊の名譽を得た。

「西に鹿児島 東に庄内」といわれる中、清隆が終始心配した庄内地方では、新政府が東北鎮台に待機を命じたり、鎮台兵や巡查隊を酒田県庁（山形県）の警護に派遣したりする動きが見られた。

地元の旧庄内士族の中には、事実、あわやという動きもあった。

しかし結局は、彼らの指導者松平親懐、元判官松本十郎（庄内）、三島通庸酒田県令（薩摩）らの尽力もあって、西郷一派に連動しての決起には至らず、清隆はほっと安堵した。

参軍退任と妻の死

清隆は、4月16日の参軍解任後、本務の開拓長官の仕事に戻った。

山県に一矢を報いたからというより、西郷の最後を見るまで戦いを続けたくなかった。

清隆の武勲は周囲も承知していた。

しかし庶民には、心情的に西郷を敬慕するものが多いと見えて、清隆邸の門前に彼らが群がることはなかった。

清隆が戦場から疲労困憊して我が家にたどりつ

くと、やせ細った、それでいて少しも乱れない妻、清が出迎えた。10歳の養女百子は、茫然とした眼差しで、それを見ていた。

清隆はもともと酒豪であったが、その後、清隆はますます酒乱気味になった。

明治11年（1878）3月28日午前8時ころ、清隆の妻、清は、とうとうこの世を去った。清隆の心は、深い悲しみの底に沈み込んでいった。

独り身になった清隆を心配して、大久保利通夫婦が頻繁に来宅し、何くれとなく清隆や家族の面倒を見てくれた。

30日には、清夫人の死を悼んで清隆邸に勅使が派遣された。

五十日祭のころ、百子が学校から帰ると、ちょうど大久保が玄関で靴を履こうとしていた。大久保は百子の肩にそっと手を置いて

「2、3日中に法要でお客さまがあるから、学校は休むんだよ」

と話してくれたことを覚えている。

その後、しばらくして、どこからともなく、

「清隆が酒のうえで妻を殺めたらしい」

という奇怪な風説が流れた。この風説には背びれ、尾びれがついて、密やかに広まっていった。

皆、半信半疑ではあったが、ひそひそうわさをし合い、止まる気配がなかった。

清隆の心配する大久保利通も、これを非常に心配し、大警視川路利良に命じて、風説のみ消しにつとめさせた。

福沢諭吉が4月4日、弁護文を発表しているが、その中では清隆の妻、清が、肺の病で咯血して夜具などに血が滲み、清隆も悲しみに沈んでいたことを記して、刃傷沙汰は幻想であることを、印象づけているかのようである。福沢は、黒田家のかかりつけの医者、杉田玄端とは昵懇の間柄で、杉田からも清隆夫人の死因が咯血によるものと聞いていた。

清隆邸の奥座敷には、亡き妻、清の位牌だけがあった。百子は、清の死後も、この家を出るようなことはなかった。

家の中で、何か異常が起きれば、一番早く気付くのは、百子のはずである。そのことからすれば、清の死は、やはり長い患いの末の死と考えるのが

自然のように考えられる。

百子は明治元年（1868）生まれで、成人して明治20年（1887）に陸軍少将黒木為楨大将に嫁いだ。

そのあと清隆は、百子の幸せを願い、婚家に気に入られるよう、しきりと手紙などで、こまごました注意を書き送っている。

黒木は、戊辰戦争、西南戦争に参戦したほか、後年陸軍大将となり、日露戦争（奉天会戦）などで活躍した。百子も清隆の期待以上の賢夫人となって、一家を支えている。

第7章 晩年の清隆

大久保利通の惨殺

明治11年（1878）5月13日の夕刻、内務省少輔の前島密（越後長岡）が、内務卿ポストを伊藤博文に譲ったばかりの大久保利通を、東京の私邸に訪ねた。

用事をすませ雑談をしているうちに、大久保は、最近、奇妙な夢を見るということを話した。

「昨夜、予は西郷と断崖の上に縛闘したり。乱撃交打、力を極めて相争えるが、忽ち足を失して二人相擁して、俱に崖下に墜落するを見る。而して予は頭蓋を割り、自ら吾が脳の微動するを見たり。奇也と謂うべし。予は今後更に人と闘う夢を見んには、或いは胸肋を裂き心（臓）の鼓動するをも目撃し得るや否やを知らず。然りと雖も、心の動くや否やの如き、夢だも見ることを願わざるなり」（前島、「鴻爪痕」）

語り終わった大久保の顔は、これまでになく蒼白で、深刻なものだった。前島は、ただならぬ気配を感じて、挨拶もそこそこに大久保邸を退出した。



大久保利通
（国立国会図書館蔵）

翌14日早朝、大久保は来客の福島県令山吉盛典（米沢）を応対したあと、太政官に出勤しようとした。

そのとき末娘の芳子は、まだ赤ん坊であったが、どういうわけか、この日に限って泣きやまなかった。

そこで子煩悩の大久保が、芳子を馬車に乗せて玄関前をひと回りしたところ、ようやく泣きやんだので、自邸を出た。

馭者の太郎と馬丁の芳松は、いつものように万一の場合を警戒しながら、馬車を急がせた。

馬車が入通りの少ない紀尾井坂にさしかかると、道端にうろうろしていた書生風の男2人が、突然刀を抜いて馬の前脚に斬りつけた。同時に、付近に隠れていた4人の男が、手に手に短刀を握ってばらばらと駆け寄ってきた。

車が傾き、馬が悲鳴をあげた。刺客は馬車から落ちた太郎を斬った。

車中で書類に目を通していた大久保は、とっさに左側の扉から出ようとしたが、刺客と鉢合わせしたので、

「無礼者」

と一喝したが、眉間を斬られ、鮮血があたりに飛び散った。

刺客は馬車から大久保を引きずり出して、さんざんに斬った。

明治の元勳大久保の最期は、さきに逝った西郷と同様、無惨であった。このとき大久保は49歳であった。

清隆の養女の百子は、当時の様子をよく記憶していた。

大久保が清隆邸にきて百子を慰めてくれた日の翌朝、清隆が出勤しようとして片方の靴を履いたとき、騎兵が駆け込んできて大久保の遭難を告げた。

清隆は驚愕し、もう片方の靴を手に持ったまま門の外に出て、大急ぎで馬車に乗り込み、駆け出していった。

前島は午前8時過ぎ、赤坂離宮にある太政官前で大久保を待っていたが、急報を聞くとすぐ紀尾井坂に向かった。

現場には、すでに警官の警戒体制が敷かれ、人々

が集まっていた。

前島の手記によると、

「変状、残毒を極む。余、茫然自失するが如く、兀立数分時、まなじり裂けて却って涙なし。漸くして気を復し、公の遺体を検す。肉飛び骨摧け、又適々頭蓋割けて脳の猶微に揺くを見る。是、何等の景ぞ。さきに余は公が、頭割れて脳の動くを夢みしを告げらる。而していま、目前却って余をして之を実見せしめらる。是、真耶。はた夢か。」(前掲「鴻爪痕」)

昨夜、大久保のいったことが現実になったことに、前島は驚愕のあまり言葉を失った。明治天皇もこの訃報を聞いて、非常に驚かれ、目には涙さえ浮かべられたという。

刺客は石川県士族の島田一良、長連豪、杉本乙菊、杉村文一、同県平民の脇田巧一、鳥根県士族の浅田寿篤の6人であった。

彼らは、かねて鹿児島島の私学校派に共鳴し、西南戦争に呼応して挙兵を企てたが果たせず、大久保暗殺に切り替えて決行したものであった。

殺害後、彼らは長文の斬奸状を新聞社に送りつけた。それには、大久保が公儀を杜絶し、民権を抑圧し、政治を私したことなどをあげ、「有司専制の弊害を改める」ため、「姦魁」を斬る、としていた。

実はこの中には、清隆にかかわる暗いうわさのことも、挙げられていた。つまり、清隆が妻を斬り、大久保がそれをかばって法を曲げた、として

非難していたのだ。

「頃日、世上に伝う。黒田清隆、^{めいてい}酩酊の余り暴怒に乘じ、其妻を毆殺す。適々、^{たまたま}川路利良其座に在りと。しかして政府これを不問に置き、利良また不知と為して止む。ああ、人を毆殺する、罪大刑に当る。しかして既にその事世上に伝評す。政府に在ては被殺人の親族これを告ぐるを待て、之を詰らんと欲するか。未だ知る可からずと雖も、利良は何者ぞ。身警視の長となり、天下の非違を検するの任に在り。」

清隆の受けた衝撃と絶望感は、例えようもないほど大きかった。そしておのれと自身の運命を呪った。

(自分は、崇敬する先輩、西郷を死に追いやる片棒を担いでしまった。自分が今日あるのは、西郷の薫陶の賜物といっても過言ではない。ところがいま、自分が兄とも慕う大久保までも、失ってしまった。しかも大久保殺害の原因には、自分の不徳もからんでいる…)

この事件の犯人島田一良らは、宮内省に自首した。島田ら6人は斬罪、関係者26人が終身禁獄となって、事件は落着した。

清隆も母のように慕っていた大久保の妻、満寿子夫人は、夫の死後、体調をこわし、この年の12月17日、夫のもとに旅立っていった。

暗殺現場付近の千代田区清水谷公園に立つ大久保利通の哀悼碑



榎本武揚との生涯の友情 —黒田家との血の結合へ

妻の清や大久保の死後、失意の清隆を慰めたのは、馬島たつという女性であった。

しかし、たつも一男（仲次郎）二女（千代子、幸子）を生みながら、生後まもなく失ってしまった。そしてたつはどこかに去っていった。このことを、養女の百子は、何一つ、語り残していない。

その後、明治13年（1880）12月10日、清隆は、安田定則（薩摩）を仲人として、丸山滝子と結婚した。滝子は本所の材木商丸山伝右衛門の娘で、本所小町と評判の美人であった。彼女はこのとき18歳、清隆は41歳であった。

清隆の養女百子は、すでに13歳になっていた。

百子が17、8歳のころから世は鹿鳴館時代に入ったが、百子と違って、滝子は社交界入りを好まなかった。

清隆・滝子夫婦は結婚から3年後には娘の梅子を、5年後には嗣子清仲を授かったが、この子たちは健康には恵まれなかった。

前述したように、清隆は、明治20年ころ、養女百子を黒木少将の嫁に出した。

ある日、榎本武揚が、なにげないふうに清隆にいった。

「あなたから受けた恩義を、子々孫々まで伝えたいと思います。ついてはぜひ、お嬢さんの梅子さんを長男武憲たけのりの嫁にもらい受けたい」

このとき清隆は枢密院議長の職にあったが、すでに軽い脳溢血などで無理はできない身体であった。歳も59歳になっていた。

榎本は、清隆より4歳年長ではあったが、農商務大臣を退いたあとも、名士として元気に飛び回っていた。



榎本武揚
(国立国会図書館蔵)

しかしそうした日々にあっても、

（自分がいくら感謝してもし切れない、生涯の恩人であり、盟友でもある清隆の余命も、あと余り長くない）

と見て、ずっと心配していた。

今日、自分が日ごろ考えていた心の中を、思い切って打ち明けたのだった。

清隆の娘梅子は、もう17歳になっており、母親譲りの美貌であった。榎本武揚、多津夫婦の長男武憲たけのりは27歳で、東京大学を出て、電気業界で活躍していた。

この申し出に、清隆は非常に感激した。そしていつもにない謹厳な面持ちで、応諾した。

明治31年（1898）暮れ、武憲、梅子の華燭の典が挙げられた。

あの箱館戦争という死闘を経て三十有余年、二人の友情は、ここに黒田、榎本両家の血の結合という形で実を結んだのだ。

榎本には、武憲の8歳下の春之助がおり、さらに3つ下の三男尚方がいたが、尚方は清隆の長男清仲と同じ年であった。

清隆は、清仲の友達として遊んでくれるように、と榎本に頼んだりした。

profile

奥田 静夫 おくだしずお

1943年福井県生まれ。金沢大学法文卒。北海道開発局官房長、(社)北海道建設業協会専務理事を経て、フリーライター・開拓史研究者。一道塾会員。札幌市在住。2006年3月、「魂を燃焼し尽くした男—松本十郎の生涯」で第26回北海道ノンフィクション大賞受賞（雑誌「クオリティ」同年4～12月号連載）。
